

日本のトキ



<日本のトキが減少した理由>

- ①明治時代の乱獲：美しい羽毛をとるための狩猟
- ②生息環境の悪化：戦中・戦後の森林伐採と開墾、農薬使用による餌の減少と中毒、生産調整による棚田（餌場）の減少、天敵の増加等
- ③個体の高齢化、近親交配による繁殖力の低下

【キン】 日本産最後のトキ。雌、昭和42年生まれ。
名前は、餌付けをした宇治金太郎さんに由来。
昭和43年捕獲、平成15年死亡。

- ・ 大正時代の終わり、日本のトキは絶滅したと思われていましたが、その後隠岐島、能登半島、佐渡島などで再発見されました。
- ・ 昭和の初期、能登に5～20羽、佐渡に60～100羽が生息していたと言われています。隠岐のトキは昭和20年に絶滅、能登の最後の1羽は昭和45年に捕獲され、佐渡トキ保護センターへ送られました。
- ・ 佐渡では、戦後になって営巣地を保護区にしたり、地元の人たちによる給餌活動や棚田（餌場）の維持作業が行われましたが、生息数は漸減し、昭和50年代に入ると10羽を割るまでになりました。
- ・ 昭和50年以降繁殖が確認できず、環境庁は残る5羽を捕獲して人工繁殖を試みることにしました。
- ・ 昭和56年に捕獲された5羽は、トキ保護センターでキンとともに飼育され、つがい形成が試みられましたが成功せず、繁殖には至りませんでした。そのうち死亡する個体がでて、昭和61年には、雌のキンと雄のミドリを残すのみとなりました。
- ・ 昭和60年からは、北京動物園から個体を借りたり、ミドリを送ったりしましたが、繁殖は成功せず、平成7年にはミドリも死亡し、日本産最後のトキ、キンも平成15年10月に死亡しました。
- ・ 日本でのトキの人工繁殖が進み始めたのは、平成11年からです。この年、中国から1つがいのトキが贈られ、初めてのヒナ優優が誕生しました。平成12年以降も順調にヒナが育ち、平成19年には、佐渡トキ保護センター（野生復帰ステーションも含む）での飼育羽数は、100羽を超えるまでになりました。
- ・ 平成19年からは、野生復帰に向けた順化訓練が野生復帰ステーションにおいて開始され、平成20年9月に初めて10羽を放鳥し、平成24年9月までに計7回、108羽のトキが佐渡の空に放鳥されました。

中国のトキ

- ・ 中国では、1930年代以降、乱獲や生息環境の悪化により個体数が著しく減少し、1964年を最後に確認できなくなり、絶滅したと考えられていました。
- ・ ところが、日本で野生のトキを一斉捕獲した1981年になって、陝西省秦嶺山脈南麓の洋県で、7羽のトキが再発見されました。
- ・ 中国は、森林伐採や農薬使用を禁止し、営巣地に監視員を配置するなど強力な保護政策を行うと同時に、巣から落ちたひなや負傷した個体を保護して人工繁殖を試みました。
- ・ 人工繁殖は、1989年に北京動物園で初めて成功し、洋県の陝西トキ救護飼養センターでは、1995年以降軌道に乗りました。
- ・ 野生トキの保護施策と人工繁殖により、中国のトキは、現在、1,000羽以上にまで増えています。



【中国の野生のトキ】 野生トキが生息しているのは、中国陝西省洋県及び同省寧陝県のみ。
（写真提供：(財)日本鳥類保護連盟 杉本吉充氏）